

『南山神学』40号（2017年3月）pp.191-215.

## 徳の主体は誰なのか？

### —キリスト教の徳論に関する一考察—

ヤコブ ライチャーニ

#### はじめに

聖フランシスコに帰せられる言葉に「主よ、私をあなたの平和の道具にしてお使いください」というものがある。神の平和の使者となるだけではなく、平和をはじめとする神の賜物が人間によってあまねく世界に伝えられるようにとの祈りである。ここで、「神の道具となる」ことについて次のような疑問が湧くだろう。道具となった人間はみな同じ役割を同じように果たすのか、道具の良し悪しや個性は何も影響しないのか、人間に独自の役割がないのか。職人と道具の関係とはいえ、神の道具となることは、神に使われるだけでなく、神に自分を用いるよう許すからこそ、神の働きと協力することを必ずしも除外するものではない。

神を信仰する人間は理性や自由を捨て去らなければならないのか、宗教という関係によって神と結ばれた人間の生活に神が干渉し自由を侵すのではないのか、宗教から影響を受けて道徳的に行動する人間は神と協力していると思われるがどこまで自分で行動しているのか、これらは古くから問われ、問う人の頭を悩ませてきたことである。殉教を例にとれば、明らかに人間の努力を遥かに卓越した能力に基づく行為であると分かるだろうが、殉教に至らずとも、有徳な生活の根幹にも単なる人間的な行為だけではなく、神の働きかけ、支えが見られる。あるいは赦し、とりわけキリスト教の説く万人に開かれた赦しや憐れみ、敵に対する愛の場合は、実際のところ、ただの人間には不可能に近いと感じる人が多い。なぜなら、その赦す行為の源泉を自分の内に見出せないからで

ある。善いことを善い行為で返し、悪を悪で報いることは確かに人間的な行為であるのに対し、悪いことに善い行為で応えることは神的な業<sup>わざ</sup>のようである。加えて言うならば、善いことに悪をもって返す行為は、人間的ですらなく人間以下に相当する、悪魔的な行為と言っても過言ではない。

ところで、徳が徳であるために、すなわち徳が完全なものとして称賛されるためには、人間が自由かつ意図的に（善を目的にして）行わなければならない。言い換えれば、人間がその主体でなければならない、ただ強制され、他の誰かに道具として利用され、あるいは偶然に善い結果に至ったという行為ではあり得ない。人間が主体でなければならないにもかかわらず、人間だけではそれほど優れた価値のある行為には到達できない、この矛盾について論じ、答える必要が生じる。誰がどこまで徳の担い手、持ち主であるのか。神に動かされることは、道具として神に操られることと同じなのか。また、人間の主体性は人間特有のものであるのか、それとも神のみが絶対的な主体性そのものであるのか。

本稿では、主として対神徳に注目しながら、伝統的に問題視されてきた表現、直訳するならば「キリストの信仰」という聖書の表現や、「神の愛」という言い方の意味を念頭に置いて、J.ピーパーの A.ニグレンに対する批判とその背景を解明する。R.グアルディーニの解釈<sup>1</sup>を手助けとしつつ、対神徳以外においても徳の原型・範型・典型は神であり、とりわけ謙遜の徳がまず神の徳であるということの意味を探り、深めたい。筆者の発想は、キリストが唱え、示した徳や、神が聖書を通して呼びかけ求めている徳の場合、ただ神／キリストのうちに模範を持っているのではなく、神の恩恵がその効果的な原因である、ということに導かれている。この試みの目的は、倫理神学にとって重要なテーマである神と人間との協働を改めて解き明かすことである。

---

<sup>1</sup> 本稿では、他に指定しない限り、Grünewald-Schöningh 社に共同出版されたグアルディーニの全集に従うので、出版社と出版年を省くことにする。

## 1. Fides Christi の問題

周知の通り、聖書の中には「キリストの信仰」という表現が出て来る<sup>2</sup>。これは属格であり、その主語は信じる人間であるものの、むしろ（行為の）創始者を指す属格（*genitivus auctoris*）とする人が多い。他方で、神やイエスを直接信仰の相手とるように見える表現（つまり与格、もしくは前置詞 *en*）もあれば、客観的に傍観者として神（の存在）を信じて認めるという用法（つまり対格もしくは前置詞 *eis, epí*）もある<sup>3</sup>。換言すれば、神における信仰、神に対する（神への？）信仰、神（の存在）を受け止める信仰、直接神に信頼する関係としての信仰、これらは果たしてみな同じことであろうか。これを表す様々な前置詞を大別すれば、神に向かう、神を対象にする、動向としての信仰と、それから神が可能にする、神のうちにおいて初めて信じる事が出来るという（神から来る）力としての信仰、という種類がある。ここで重要な観点は、やはり、人間が勝手に神に向かおうと思って信じ始めるというよりも、むしろ神の招きや刺激によって信仰が生じる、ということである。信じる対象があって初めて信仰が呼び起こされるのである。そういう意味で、神は信仰の発端であり、由来であり、創始者である（ヘブ 12:2）と言っても過言ではないが、一方で神は信じる過程の主体ではないかと問うことも出来る<sup>4</sup>。言うまでもなく、神を対象とするなら、神が自分自身を信じたり、神と特別な関わりにあるイエスが他の人

<sup>2</sup> 例えば、ロマ 3:22, ガラ 2:16, 3:22, フィリ 3:9, ヤコ 2:1, 黙 14:12（イエスの信仰）。文法的には属格であるが、文脈によって訳し方が異なったりする。似たようなものは、*timor Domini*（主への畏敬）であるが、明らかに神はその主体ではなく、恐れ敬われる相手であることである。

<sup>3</sup> 神を信じるという対格に関しては、ガラ 3:26（*en*）、コロ 1:4, 2:5（*eis*）、または 1 テモ 3:13, 2 テモ 3:15 に見られる「キリストにおける信仰」やヘブ 6:1（*epí*）を参照。神に信頼するという与格に関してはロマ 4:3, ガラ 3:6, テト 3:8, ヤコ 2:23, 1 ヨハ 5:10 を参照。

<sup>4</sup> 例えば、M. COZZOLI, *Etica teologale: Fede, carità, speranza*, San Paolo: Cinisello Balsamo, 2010, 29 (“...il suo [=di Cristo] ascolto obbediente del Padre diventa nostra fede, il suo amore per il Padre e i fratelli diventa nostra carità, il suo abbandono e ritorno al Padre diventano nostra speranza. Il cristiano pertanto crede, ama e spera non con una propria fede, carità e speranza, ma con la fede, la carità e la speranza di Cristo in noi”) 参照。

間と同様に神を信じたりするという表現は聖書的にはあり得ない。かと言って、人間に信じさせることによって神も間接的に人間のうちに何らかの形で信仰を引き起こし、信仰の主体であるとも言えるのではなからうか。この“πίστις Χριστοῦ 論争”は複雑なものだが、権威ある多くの研究者に従えば、キリストが信用されるに値するとか、キリストが忠実であるからこそ、人間の信仰は可能となる、すなわちこの場合の「信仰」は（キリストの）*faithfulness* もしくは *affidability* を意味するのだ、とまとめることが出来る<sup>5</sup>。人間が行う「キリストの信仰」とは、キリストが持つ信仰に限らず、キリストによって条件づけられ、特徴付けられ、可能となった信仰のことなのである。また、キリストはキリスト信仰の対象であるばかりか、その内容であるとも言える。神／キリストの頼もしさは必要不可欠ではあるが、信仰をもって応えるのはあくまでも自由な人間であることを念頭に置く必要がある。以上のことを踏まえて、「イエスの信仰」という表現は多義的であり、様々な意味合いが含まれることが分かる。その主な例は次の通りである。

- (1) キリストによって定義づけられるキリストへの信仰（キリストがその対象であり、対象によって信じる人間は決定される）
- (2) キリストによって条件づけられた神への信仰（キリストを模範とするキリスト教的な信仰）
- (3) キリストが与える信仰（それによって、信仰の道を切り開き、それを可能にした）

---

<sup>5</sup> H.U. VON BALTHASAR, “Fides Christi”, in ID., *Sponsa Verbi*, Einsiedeln 1961, 45–79; G. CANOBBIO, *La fede di Gesù. Atti di convegno*, Bologna 2000; M. BIRD – P. SPRINKLE, *The Faith of Jesus Christ: Exegetical, Biblical, and Theological Studies*, Peabody (MA) 2009; M. EASTER, “The Pistis Christou Debate. Main Arguments and Responses in Summary”, in *CBR* 9 (1/2010), 33–47; K.F. ULRICHS, *Christusglaube. Studien zum Syntagma πίστις Χριστοῦ: und zum paulinischen Verständnis von Glaube und Rechtfertigung*, Tübingen 2007; A. VANHOYE, “πίστις Χριστοῦ: fede in Cristo o affidabilità di Cristo?”, in *Biblica* 80 (1999), 1–21. ここでは、特に最後の著書に依拠している。

- (4) キリストが実際に持っていた信仰、自身がその主体である信仰（新約聖書のテーマではない）
- (5) キリストと共に人間が持っている信仰（人間と共にキリストが信じること）

そもそも、神との関係について主体と客体（対象）として語ることは出来るのだろうか。というのも、神は厳密な意味で信仰という認識の対象と言えないのではないかと考えられるからである。科学のように、人間が中立の立場におり、向き合う対象を自分の前に置き、それをなるべく客観的に扱い、自分とそれとの間に距離を取ることは、対人的な関係において不可能のはずである。愛の働きを例にとれば、主体と客体の明確な区別ができず、他者が生きたり感じたりすることを、あたかも自分自身のことであるかのように受け止めることは稀ではない。信仰の場合も、信じる人間が神から切り離されて、神を遠くから見つめたり冷静に調べたりするのではなく、意識しようがしまいが、常に神のうちに生き、動き、存在する（使 17:28）と言った方が適切であろう。キリストを信仰の対象や相手にする限り、最終的に少しもキリストに惹かれず、巻き込まれず、条件付けられないということはある得ない。従って、宗教は神を問題視する学問ではなく、既に与えられている神との関係を多少たりとも解明し、自覚し、より深めるためのものである。神を理解するには、神の立場に立ち、神と共に観る必要がある。教皇ベネディクト 16 世も同様に、キリストの眼差しへの参与について次のように指摘している。

イエスが信仰にもたらした完全性にはもう一つの決定的な側面があります。信仰において、キリストは、私たちが信じる方であり、神の愛の最高の現れであるだけではありません。キリストは、私たちが信じることができるようになるために、私たちをご自身へと結びつけてくださるのです。信仰は単にイエスへのまなざしだけではありません。それはイエスの視点

から、イエスの目を持って見ることであります。それはイエスの物の見方にあずかることです<sup>6</sup>。

さて、イエス・キリストが信仰を持っていたかということについては、人間が神を信じるのと同じような仕方ではキリストは決して神を信じておらず、その“信仰”は人間の信仰にとって参考や模範とはならない、としか神学的に言い様がない。なぜなら、父なる神を知り、神であったキリストは、人間と同じ意味において神を信じる必要がなく<sup>7</sup>、また人間と神との関係とは全く違う特有の関係であったからである。そのため、新約聖書の視点からすれば、キリスト自身も神と並んで、人間によって信仰される存在である。従って、キリストの神に対する関係は人間の信仰にとって模倣されるべきモデルではなく、むしろそれに参与することによって信仰が可能となるところのものである。キリストが本質的に持っている神との親しさを、人間は信仰によって分かち合うのであって、キリストを抜きにしたキリストと並行するような信仰ではない。キリスト教神学的に言えば、キリストと神との深い交わりは最も完全な、唯一の神との関係であり、神を信仰する人間はこのキリストの実存を分有し、キリストと一体になることによってそれに引き込まれる。対神徳としての信仰は確かに人間そのものによって発揮されるが、その実神によって担われ、支えられ、神の顕現によって可能にされる能力であることが分かる。あるいは、R.グアルディーニ (1885-1968) の言葉を借りるならば、人間の信仰とキリストの神への態度はお互い異なるが、信仰によって人間はキリストと神との関係のうちに置かれ、

<sup>6</sup> ベネディクト 16 世『信仰の光』, 18 項, また 21 項も参照。

<sup>7</sup> R. GUARDINI, *Das Wesen des Christentums*, 157-158 参照 (“Er [=Jesus] selbst aber ‘glaubt’ nicht. Für sein eigenes Dasein ist das Wort gegenstandslos. Er steht nicht da, wo geglaubt wird, sondern da, wo das ist, worauf sich der Glaube richtet. Genauer gesagt: Er macht das Glauben möglich”)。この見解は純粋なスコラ学の視点からも唱えることができる (T. AQUINAS, *STh*, III, q. 7 a.3: “Christus autem in primo instanti suae conceptionis plene vidit Deum per essentiam, ut infra patebit. Unde fides in eo esse non potuit”)。

立たされる、と言えよう<sup>8</sup>。このように考えて初めて、信仰するということはただ完全に人間の行為ではなく、人間自身が自発的に行い、それによって何かを得るに値するような功績ではないことが理解される。さもなければ、業を否定しながら信仰を強調すると解釈されるパウロも、結局信仰をもう一つの業として考えるという結論になりかねないだろう。いずれにせよ、信仰は単に人間に由来するのではないが、グアルディーニの立場から見ると、信仰は神によって与えられる人間の行為なのだ<sup>9</sup>、と解釈しなければならない。信じることがキリストの視点に立つことを意味する<sup>10</sup>なら、人間の信仰と（神に対する愛の関係である）イエスの信仰は、何らかの形で必ず結ばれている。そもそも、信仰は誰かに対する、何かについての意見、認識、感情...ではなく、キリストとの一致の関係、キリストの現存在を自分の現存在の形相と内容として受け入れることに他ならない<sup>11</sup>。そこから、新しくなった人間とキリストははっきり切り離され

---

<sup>8</sup> R. GUARDINI, "Die Liebe im Neuen Testament", in *Wurzeln eines großen Lebenswerks*, III, 58 参照。それによると、人間にとって Glaubensakt であるものはキリストにとっては Existenzakt である。とはいうものの、愛においてはキリストは確かに効果的な模範であるし、キリスト教的な愛はキリストの父なる神に対する愛の Mitvollzug である。

<sup>9</sup> R. GUARDINI, "Lebendiger Geist", in *Unterscheidung des Christlichen*, I, 145 参照。

<sup>10</sup> R. GUARDINI, *Christliches Bewußtsein*, 45 ("Der Glaubende tritt auf Jesu Standort"); "Vom Wesen katholischer Weltanschauung", in *Unterscheidung des Christlichen*, I, 33 ("Glauben heißt, zu Christus treten, auf den Standpunkt, auf dem er steht. Aus seinen Augen heraus sehen. Mit seinen Maßstäben messen"); "Gedanken über das Verhältnis von Christentum und Kultur", in *Unterscheidung des Christlichen*, I, 175 ("Der christliche Glaube bedeutet eine geistige Bewegung, durch welche der Mensch zu Christus tritt. Damit auf jenen Standort tritt, wo die offenbarende Gestalt, Christus, steht. Glauben bedeutet also auch, zur Welt in einem Verhältnis stehen, wie Christus stand").

<sup>11</sup> その形相とはまず十字架の形をした愛なのである。R. GUARDINI, *Wesen des Christentums*, 49 ("Glaube' meint also nichts Psychologisches, keine bloße Bewußtseinsform, sondern ein reales Bezogen- und Verbundensein. Glauben, durch die Taufe Erneut- und Besiegeltwerden, meint einen Vorgang, durch welchen der Mensch in die pneumatische Wechsel-Inexistenz mit dem ewig-wirklichen Erlöser tritt; Gestalt, Tun, Leiden, Sterben und Auferstehen des Erlösers als Form und Inhalt eines neuen Daseins empfängt. [...] Wie der Glaubende aus dem Erkennen Christi heraus erkennt, und so an dessen Wahrheit teilhat, so liebt er auch aus den 'Eingeweiden', aus der Liebe Christi und hat so an einer Herzensfülle teil, die über alle nur menschliche Möglichkeiten hinausgeht").  
そこから、キリストが人間と共に人間のうちに（人間を通して？）愛するために、信仰

得るものではないから、キリストの実在性やその父の特別な認識への参与が信仰であり<sup>12</sup>、またイエスの命を自分なりに生き続けることが信仰生活であること、さらにキリストの心を持ち、キリストの愛をもって愛し得ることが真の愛である、ということが伺える。言い換えれば、信仰はキリストと結ばれ、キリストに向かって、キリストの実存的な重心に立ち、そこから生きることでもある<sup>13</sup>。もう一步踏み込むと、このキリスト教的な信仰はただキリストと神との関係に与るだけではなく、それを共に実現させること (Mivollzug) でもある、とグアルディーニは大胆に繰り返し強調している。

信仰という関係、絆、存在様態は神を対象とすると同時に、人間が神の呼び起こしによってただ信じさせられているわけではないことも強調する必要がある。信じるのは個々人であり、個々人が直接神と結ばれることによってその自己が根拠づけられるのではないだろうか。M.ルターが言うには、信仰は人格を為す (fides facit personam) が、それはつまり信仰は新しい、より現実的な実存の始まりであり、その根本的な行為であるということの意味する<sup>14</sup>。神の招きやその導きの中に人間の「己」が消滅するどころか、存在へと呼び覚まされるのである。信仰は与えられ、キリストの実存によって決定づけられはするが、信じるのは個々の人間である<sup>15</sup>。まとめると、自分自身に由来するものではない

---

という実存的な関係が前提であることが垣間見られる。本稿における引用文中の下線は筆者による。

<sup>12</sup> J. DANIELOU, *Dio e noi*, RCS Libri: Milano, 2009, 71 (“Soltanto la fede, che è partecipazione alla conoscenza per cui Dio conosce se stesso, penetra in questa tenebra e conosce Dio...”), 74 参照。

<sup>13</sup> R. GUARDINI, *Die Existenz des Christen*, 301 (“[Es kann gar nicht entschieden genug betont werden....] daß ‘Glauben’ nicht heißt, metaphysische Wahrheiten und ethische Forderungen anzunehmen, sondern mit dem wirklichen, geschichtlichen Christus verbunden zu sein, auf Ihn hin und von Ihm her zu existieren”).

<sup>14</sup> M. LUTHER, *De veste nuptiali*, WA 39/I, 283,1 参照。ただし、ルターは純粋な人間の徳を高慢として否定する。J. DANIELOU, *Dio e noi*, RCS Libri: Milano, 2009, 74 (“[ルターによれば] Non vi sono altre virtù che quelle che la grazia di Dio opera nell’uomo e ogni idea di merito, di cooperazione alla propria salvezza da parte dell’uomo è puro orgoglio”) 参照。

<sup>15</sup> R. GUARDINI, *Der Herr*, 357 参照。



信仰の主体はしかし確かに人間でもある。信仰において人間は神の働きの道具に過ぎないのではないし、また、あたかも自分のものでないかのようにキリストの信仰をもって信じるわけではないが、神と一致している人間だけは信じる事が出来るという一種の矛盾が見られる。また、かつてイエスが信じていた、あるいは現在人間のうちに信じていると端的に言うことは出来なくても、人間の信仰にとってそれらの存在と働きは大前提である。信じることは確かに恵みではあるが、人間の自由はただ神に呼ばれて信じる機会を受け入れるか拒むかというレベルに留まることはできない。つまり神は信仰を呼び起こすのだが、人間の信仰として呼び起こし、恩恵は人間をますます自由にするのである<sup>16</sup>。さて、他の徳はどうであろうか。ここまでにもその言葉が何度か挙がっていたが、以下愛から順に見ていくこととする。

## 2. キリストの愛に促されて (2 コリ 5:14 参照)

信仰と同様に、聖書においては愛もまた主語として神にかかる場合が多く、また当然のことであるが、果たしてみな同じ意味であろうか。一見すると、神の愛は人間に由来せず、むしろ神の愛が我々の心に注がれ (ロマ 5:5)、イエスによって神の愛が弟子のうちにあり (ヨハ 17:26)、弟子がキリストの愛にとどまり (ヨハ 15:9-10)、愛し合うことによって神の愛が露わにされ完成されるように感じられる<sup>17</sup>。キリストの愛は、キリストと神との間にある愛でもあれば、キリストが弟子に対して持ったその同じ愛でもある。言い換えれば、神に

---

<sup>16</sup> R. GUARDINI, *Gläubiges Dasein*, 58 ("Gnade bedeutet, daß Gott alles im Menschen wirkt, 'das Wollen und Vollbringen'; indem Er es aber wirkt, wird es dem Menschen zu eigen, und der Mensch selbst ist es, der es tut"); *Tugenden*, 180 ("Er [=Christus] hängt die Sühne nicht über ihre Schultern, wie ein Gewand, noch schreibt Er das Rechtsein über sie wie einen Gerichtsspruch, sondern eine schlechthin einzigartige Einssetzung vollzieht sich. Der Erlöser schenkt seine Sühne wie seine Gerechtigkeit dem Menschen; dennoch ist es die Seine, nicht des Menschen selbsterzeugte. Darin vollendet sich jene Liebe, die dem Menschen sein Dasein wohl als wirklich eigenes, aber als endliches und geschenktes, ebenso wie sie ihm seine personale Freiheit und Verantwortungsfähigkeit als wirklich eigene, aber als geschenkte gegeben hat") 参照。

<sup>17</sup> 他に「キリストの愛」に関しては、ロマ 8:35、エフェ 3:19、2 コリ 5:14 を参照。

愛された人はその愛を引き受けて、まさにその愛をもって他人を愛するという連鎖になっている印象さえ受ける。愛のみならず、キリスト者は自分が受けているのと同じ神の慰めでまた兄弟をも慰める（2 コリ 1:4 参照）。これを拡大解釈するならば、他人とりわけ敵を赦すという（愛の基本的な）行為がまさに神独自の態度を表すものである限り、赦しは神の行為の模倣や反映ではなく、神の赦しへの参与としてしか成立し得ないと言っても過言ではない。純粋な人間の力である限り、無償の赦しはほぼ不可能だと広く経験されている。さらに、冒頭で述べたように殉教という最高の信仰の証し、あるいは信仰の証しの完成も、決して人間だけの行為、人間が一人で自ずからパフォーマンスする出来事ではなく、神の働きによって成し遂げられるものとしてしか理解され得ない。それに至る前から始まっていた神との協働の最終的な開花でなければ何であろうか。

ところで、愛は一つしかないわけではなく、実際には様々な愛の種類がある、と文法分析的なレベルでも指摘されて来た。名著となった A.ニグレン（1890-1978）の著作 *Agape and Eros* では、ある愛の種類は人間には可能だが、別の種類は神にしか出来ないと二分化されている<sup>18</sup>。厳密に言えば、自分自身も利益を得る家族愛や友愛はもちろんのこと、欲望や性的な色彩を帯びる愛は人間独自の愛（エロス）であり、新約聖書が提示する自我の忘却や自己犠牲を含む崇高な愛（アガペー）については、神しかその主体になれない、とニグレンは考えている。従って、人間にできることは、エロスを最小限に抑え、神のアガペーの道具となることだけである。つまり、協力・協働ではなく、退いて自分のうちに神に働かせるのである。ニグレンによれば、真の愛は神のアガペーだけであり、何も必要とせず何も要求しない代わりに、全てを無償に与え尽くす愛なのである。この愛こそ、聖書に言わせるならば神（の中）から来る（1ヨハ4:7）もので、人間にとって程遠いものと言える。

---

<sup>18</sup> その出典に関しては、ここでは、以下引用するピーパーの著作に依拠する。

しかしながら、それを批判する J.ピーパー（1904-1997）の反論も非常に興味深い<sup>19</sup>。そもそも、神が究極に尊重する人間の尊厳と主体性に鑑みて、自らの愛を發揮するために人間を手段として、言うなれば“からくり人形”として使用するというイメージは粗末にして不十分である、という。確かに、最も優れたレベルの慈愛たるアガペーはただの人間、あるいは人間一人には不可能に思えるが、人間側からのある種の協力なしにも神は人間を通して誰をも愛せないのではなかろうか。その意味においてアガペーというのは、神の恵みによって高められて初めて可能になった、まさに人間的な愛であると言える。ただし、その神と人間との間に成立する協働は決して数学的・質量的に表すことができず、どこまで純粋な人間の愛なのか、どこから神の助けによる超自然的な愛なのか、明確に言えるものではない。ピーパーはこれを、小舟を漕ぐイメージによって巧みに表している。すなわち、風が後ろから吹くとき、漕いでいる人間の努力と風の方で得られる支えは確かに切り分けられるものではないのである<sup>20</sup>。神

<sup>19</sup> J. PIEPER, *Faith – Hope – Love*, Ignatius Press: San Francisco 2012<sup>2</sup>, 211ff. ピーパーは批判的にニグレンの立場を次のようにまとめている。「ルターの言葉というものは「愛においてとどまる者は、…もはやたんなる人間ではなくて、神である」というものであり、ニグレンの解釈ではその意味はこうである——「キリスト教的愛の本来の主体は人間ではなく、神自身だというのである。では人間は何であろうか？それは「神の愛が流れてゆく管であり、運河に過ぎない」——これは、さきに述べたように明快な教えである」（稲垣良典訳『愛について』、エンデルレ書店、1981年、98-99頁）。それから、次のように反論して答える「愛において他者とむきあい、「君がいるってことはすばらしい」と言明するのは、この「何者」かであり、人間自身にほかならない。もしも人間がいづこかにおいて、またなんらかの時に於いて単なる「運河」や「管」ではなく、真実に主体であり、ベルソナであるとしたら、それはまさしく愛をこめて或る人にむかう行為においてであろう。また「超自然的」な愛においても——それをカリタスと呼ぼうとアガペと呼ぼうと、またその力が「恩寵」によって養われるにしても——そこにおいても愛する者とはわれわれ自身にほかならないのである」（同上、103頁）。

<sup>20</sup> J. PIEPER, *Faith – Hope – Love*, Ignatius Press: San Francisco 2012<sup>2</sup>, 242（邦訳 133-134頁「もしもアガペ〔カリタス〕がなにか「超自然的なもの」、つまりわれわれの固有の力によってではなく、恩寵によって我々に授けられた神的な力によって養われるような「徳」であると考えられたとしても、それがまったく自然的な、幸福ならびに実存の成就へとむけられた自己愛からは切りはなされたものだ、と考えるべきではない。[...]もし私が追風にのってボートを漕いでいるならば、そこで私自身の努力に帰すべきものと、風に帰すべきものとをどうして区別できるだろう？」）。

秘体の頭としてのキリストは様々な特質を有し、彼独自のものを持っているが、彼と存在論的に繋がれている以上、それらはまた各々の肢体の所有物にもなっている——per participationem（ある程度までではなく、ある仕方で）。キリスト者には神の聖性や神の正義以外に、何の聖性も正義もない<sup>21</sup>。聖書によれば、「義を行う者は、御子と同じように（καθώς），正しい人です」（1ヨハ3:7）。また、神は人間を通して働き、自分を顕すだけではなく、人間のうちにそれを成し遂げる。補足しておくとして、ピーパーがニグレンの立場を批判的に見る理由が他にもある——人間は神からも人間同士からも全く無償の愛を受けたくない、受けるのが恥ずかしいということと、また神が無関心であるかのように人間に何も期待せず、ただ上から一方的にアガペーを注ぎ込むのではない——ということである。要するに、純粋なアガペーも純粋なエロース（すなわちカリタス）もあり得ないのである。

グアルディーニの思想を見てみると、愛はやはり徳の中でも行動のキリスト的形相であることが浮き彫りになる。愛は人間に（も）属するために与えられる神の賜物に他ならない。崇高な理想である以上、不完全な形でしか達成されないが、それでも重要である。愛とは、聖霊のうちに自己を譲与する神の特別なあり方と行動の形相である。その神に近づき、理解するのであれば、前提として似た者になるべく同じ特質を持ち、つまり愛をはじめとする徳を実践するしかない。このことから、徳は神を理解・受容するための器官である、とグアルディーニは述べる<sup>22</sup>。言い換えれば、キリスト者はキリストの立場に立って、

<sup>21</sup> かと云って、人間がただ神の義などを貸されているという発想は不十分である。義を例として挙げ、義である神と義人の関係について昔から考えられてきた。一方では、神の義は人間を義化する。他方では、神の義は一義的な意味で神自身だけのものである。それを合わせて考慮すると、幾つかの可能性が開かれる——（1）義は義人に全面的に与えられるが、それは自分のものとしてではない、（2）義は薄めた形で義人にある程度まで与えられる、（3）義人の義は神の義に不完全に類似しており、所詮別個のものである、（4）義人には独自の義はなく、ただ神の義の容器であるかのようなものである。真の存在はただ現に神に属し、人間には分有される、また義人は義によって産まれるという考えに関しては、マイスター・エックハルトの思想を参照。

<sup>22</sup> R. GUARDINI, "Gedanken über das Verhältnis von Christentum und Kultur", in *Unterscheidung des Christlichen*, I, 192 ("Das sind die Akte, in denen uns Gott selbst das

そこからキリストと共に、キリストの愛をもって愛するのである。すなわち、聖書的に言うならば、信者はキリストの心を持っており、キリストにおいて他人を愛している（1 コリ 2:16、フィ 1:8 参照）のと同じことである。グアルディーニに話を戻すと、愛することは自分から重心を移すことを意味しており、愛は神の愛に典型を持つといえども、その同じ愛は何度も別の主体においても実現される可能性を持っている。信仰はやや特殊な例ではあるが、愛に代表されるすべての徳は結局のところキリスト者にとって神から下る賜物であり、一義的に神の持ち物であり、厳密に言えば神の最も内なる命なのである。そして、人間はこの命を自分のうちに実現させることを許されており、その使命とそれに対する責任を授かっている。代表的な箇所を引用すると、次の通りである。

キリスト教の実在には、信仰でのみわかる神秘がひそんでいる。ここに一人の人間、被造物、一片の世界がある。だが、その内で、生ける神が立ち上がられる。それは世界でも、被造物でもない。神は神であられ、自己の内面に生きられる。だが、御自身の内面性に人間をあずからせられる。御自身の物から、ご自身の物としてではなく、お恵みから、お恵みとしてである。人間が信じ、愛し、望みながら、この関係に入ると、自分自身からくるのではない生命が、その内に目覚める。だが、それは彼の内面で実現し、それで彼は、その創造者の考えられた人間と、なるのである。信望愛は「神々しい」「そそごこまれた」徳で、これによって人間は、神々しい生活を実現する。この徳の下には、使徒パウロが手紙で書いている、キリスト教的行為の口では言えぬ統一が存在する<sup>23</sup>。

---

Organ gibt, ihn zu erfassen: die 'göttlichen Tugenden'. Die aus Gottes eigenem Leben stammenden, dem Wiedergeborenen zu eigen gegebenen und von ihm sich auf Gott zurückwendenden Lebensbewegungen des Glaubens, der Liebe, der Hoffnung"). これはラテン語の *com-prehendere* という語を反映し、何かを理解することと、受容することとは語源的につながっている。

<sup>23</sup> R. GUARDINI, *Welt und Person*, 57 (永野藤夫訳『世界と個人・摂理——キリスト教の人間論の試み』天使館, 2002, 64-65)。

以上のことから、「神の愛」という聖書の表現は、「神に対する愛」「神から受ける愛」「神を条件とする愛」など様々な意味合いを持つものの、その区別は結局それほど重要ではないことが分かる。換言すれば、神が愛することに（神の決意によって）人間が引き込まれ、人間が完全に愛することに神が（必然的に）引き込まれるのである。こう考えると、対神徳——信仰や希望や、ことさら愛——は神を由来、作者、創始者とする一方で、人間はその独立した役者、主人公でなければならないと言えよう<sup>24</sup>。神を自己から離れた客観的な対象とせず、証明や神の啓示によって強制されることなしにも自由に信じる人間の信仰が自己の行為であり、人格の根源である。これと同様に、愛も論理にとって一種の矛盾を孕んでいる。それは、真の愛によって人間が他者に似たものになり、自己は捧げられ、漸進的に費やされていくと同時に、消耗するこの過程において初めて人間の自己が把握され保存されるようになるということである。愛される二つの主体は、一方では融合されるようだが、他方ではその区別が保たれ、二人であるからこそその関係は合成ではなく一致と言える。場合によって、三位一体の不完全な類比に過ぎないかもしれないが、婚姻の深い絆などによって結ばれる二人はあたかも同じ存在を享受する二つの位格のようなものである、と言えるのではなからうか。このように考えられる愛は間違いなく神を可能性の条件として必要としている。ただし、愛に実存的に結ばれる人間とキリストの場合を考える際に、指摘すべきは、対神徳をはじめ、徳はまず神のものであるにしても、全き他者としての神のものではない、ということである<sup>25</sup>。

いずれにせよ、グアルディーニにとってキリスト教的な愛の徳は、キリストを典型とし第一の主体とするものであり、御父と御子がお互い愛する過程へ参

---

<sup>24</sup> R. GUARDINI, "Die christliche Innerlichkeit", in *Unterscheidung des Christlichen*, II, 84; *Die Bekerung des Aurelius Augustinus*, 221; *Johanneische Botschaft*, 62; *Predigten zum Kirchenjahr*, 204, *Christliches Bewußtsein*, 91; *La vita della fede*, Brescia 2008<sup>2</sup>, 110 など参照。

<sup>25</sup> *Freiheit, Gnade, Schicksal*, 83; *Welt und Person*, 40; *Die Existenz des Christen*, 75; *Der Herr*, 554 参照。

加し、実現するものである<sup>26</sup>。言うまでもなく、キリスト自身の実存に入ることの意味するこの出来事は、神の恩恵を前提としている。キリスト自身も父なる神の愛を受け取り、反映し、その愛の延長線で愛していたが、それでも自分のものとして愛を持ち、発揮していたことがこのことの範型である。人間の最も人間らしい行動は徳に代表され、徳においてもっともそれらしいレベルに達している<sup>27</sup>。キリスト教的な行為を説明するには、やはり神によって与えられており、キリストの持ち物であること、それでいてなお人間に属するものであるという相反する要素を結び合せ、調和させる必要がある<sup>28</sup>。信仰の場合は、キリストの存在様態に植え付けられることであり、神の招きによって促されることであるものの、人間の自発的な行為でなければ救いにとっての価値がない。愛をはじめとする他の徳はこれとは少し異なるが、それでも繋がってはいる。すなわち、人間がその主体でありながらも、神の聖化によりもっと高く深い程度に達し、神の特質を授かりそれを発揮するからこそ、ある意味で神が人間のうちに、人間と共に、人間を通して愛し、赦し、望んでいる、と言えなくはない<sup>29</sup>。

<sup>26</sup> R. GUARDINI, "Die Liebe im Neuen Testament", in *Wurzeln eines großen Lebenswerks*, III, 58, 91; *Predigten zum Kirchenjahr*, 204 ("Unsere Liebe ist ja 'eine göttliche Tugend'; in irgendeinem Sinne ein Mitvollzug der Liebe Christi") 参照。愛だけでなく、キリスト者として生きること全体、キリストの生を共に実現することを意味している ("Jesus Liebe", in *Johanneische Botschaft. Jesus Christus: geistliches Wort*, 181)。したがって、愛する人間のうちにキリスト自身が愛していると言えよう。

<sup>27</sup> これはグアルディーニの基本的なスタンスである——キリスト教的な実存において初めて人間は真に人間らしくなる (R. GUARDINI, *Wille und Wahrheit*, 106 参照)。キリストの内在于キリストに属することによって人間は脱人格化するわけではない。

<sup>28</sup> R. GUARDINI, *Tugenden*, 182 ("Hier setzt sich jene Grundformel der christlichen Existenz fort, die er im Galaterbrief ausspricht, wenn er sagt: 'Ich lebe, doch nicht ich [bin es, der da lebt], sondern Christus in mir.' (Gal 2,20) So bekommt alles christliche Tun diesen Doppelcharakter: den Ernst, die Bereitschaft, die Bemühung, daß Christi Gerechtigkeit Frucht bringe; sofort aber auch das, was Jesu Wort ausdrückt: 'Wenn ihr alles getan habt... dann spricht: wir sind unnütze Knechte.' (Lk 17,10) Diese beiden 'Momente' tragen, eines im anderen, das christliche Tun. Sie begründen auch jene letzte Unbegreifbarkeit, die allem christlichen Tun eignet: daß es dem Handelnden ganz zu eigen, und doch geschenkt ist; ihm gehörig, und doch Eigentum Christi".)

<sup>29</sup> 結局、信仰についても神がそれを人間を通して実行している、とグアルディーニは言うのをためらわない (*Vom Leben des Glaubens*, 88 ["Glauben ist ja eine 'göttliche Tugend'". Lassen wir dem Wort seinen mächtigen Sinn: es ist eine Tugend Gottes. Jenes hohe Tun,

この意味において、徳、とりわけ対神徳は人間性の完成でありつつ、人間性の卓越でもある。神は人間の愛を前提かつ土台としながら愛しているのである。この世に現れ得る神の愛は、人間の協力を得た愛の他にはあり得ない。その愛を軸とするキリスト者の実存の *entelecheia* はキリスト自身である、とグアルディーニと同じく主張することができる<sup>30</sup>。優れた有徳な生活を送りながら行動する主体としての人間とは、ただ本来の自然的な人間だけではなく、キリスト者の場合にはキリストと結ばれ、キリストによって浸透された新しい人間に他ならない<sup>31</sup>。よって、徳もどちらにも属さなければならない。まとめると、人間

---

dessen er allein fähig ist: sich selbst als wesende heilige Wahrheit zu erfassen. Diese Tugend übt er auch durch die Menschen hin. Darin schenkt er sie ihnen; 'gießt sie ihnen ein'. Nun sind sie es, die da glauben – aber Gott 'glaubt' in ihnen"] 参照)。ここで言う信仰は単なる徳としてではなく、もっとユダヤ教的な意味合いで（自分を捧げるといふ実存的な関係として）理解されるべきである。

<sup>30</sup> R. GUARDINI, *Welt und Person*, 146, 154 (永野藤夫訳『世界と個人・摂理——キリスト教的人間論の試み』天徳館, 2002, 179)。「[新しい創造物の] この意味合いは、キリストはこのように信者のうちにあり、自然の人間のうちに靈性の完成の作用のようなのを、ごらんになられる、という言葉において、深まるのである。神の考えられた本質の原像として、また、この姿を具体的存在たらしめようと努める、権力としてである...」そして、その典型的な例はパウロである。「キリストはパウロを、人間によって得られる神との関係に、引きこまれる。自からをパウロの存在の内容となさって、自己にとらわれているのを救われる (188 頁)」人間は「救い主の存在の靈的に与えられた、信じて実現された共同実行」(192 頁)の主体ではあるが、「我」と言えるのは自律したことではない。「人の個人を規定した、神に対する我一汝の関係は、「神」だけでなく、三位一体の神をめざす。この関係は、キリストが三位一体の神に対する関係に、組み込まれる。人間の我一汝の関係の本質は、キリストの神との関係の同時成立にある。おん父は、本質的で決定的汝である。おん父に汝と言う者は、おん子である。キリスト教徒となることは、キリストの実在性にあずかることである。生まれ変わった者は、キリストの汝なる言葉に加わって、おん父に「汝」と言われる。最後の決定的意味で、キリストに「汝」とは言われない。キリストに向かって行かず、共に「キリストにしたがい」、キリストの中へ入り、出会いを完成する。キリストと共におん父に「汝」と言い、自分を「我」と言われる」(198-199 頁)。

<sup>31</sup> R. GUARDINI, "Heilige Schrift und Glaubenswissenschaft", in *Wurzeln eines großen Lebenswerks*, II, 360 ("Das eigentliche Subjekt des Glaubens ist 'der neue Mensch'; der Wiedergeborene; das Kind Gottes, das überhaupt erst durch die Gnade geschaffen wird"); また *Der Herr*, 535; "Die menschliche Wirklichkeit des Herrn", in *Das Wesen des Christentums*, 198 を参照。



の生活は神が徳を発揮する場ではなく、人間自身が神の徳を発揮する場である。

### 3. 神の徳としての謙遜や忍耐

ここまで対神徳を主題にしてきたが、これら三つの徳が何らかの形で神と直接結ばれることは無理からぬことである。この中で一番論じる対象になりにくいのは「希望」の徳であり、グアルディーニにおいても確かに言及が少ないが、キリスト教の実存は特に希望において発揮されるとも述べており、従って希望も愛と信仰からは切り離せない<sup>32</sup>。信仰も希望も愛も我々における神的な生命であり、新しい実存の基本的な行為なのである。グアルディーニの思想にさらに一步踏み込み、誰が最初に希望を持つのかと問うならば、それは神自身であるとの結論に至る。なぜなら、今までの失敗にも、これから繰り返されるに違いない失敗にもかかわらず、神は人間に対して望みを抱き続けており、人間自身よりも神は「今度こそ立ち直り、同じ間違いを犯さないだろう」といつも人間を無邪気なほど信頼しているからである。人間が諦めず、相手の良い変化の可能性を疑わず、将来に向けて計画を保ち続けることは、「くすぶる灯心を消さない」(マタ 12:20) 神／キリストの助け及び力によってでなければ、不可能に近いであろう。希望を神に帰することに関して、詩人シャルル・ペギーも参考になる。曰く、人間が神を信じたり愛したりすることは勿論、神が人間を愛することも当たり前だが、希望は期待され得ず、驚きを与えるものである。神が自ら自由な被造物として創った人間に近寄るといことはリスクを犯すことである。神の希望の王冠は、人間の回心である<sup>33</sup>。考えるべきことは、この神の

<sup>32</sup> R. GUARDINI, "Gedanken über das Verhältnis von Christentum und Kultur", in *Unterscheidung des Christlichen*, I, 203 ("So ist die bestimmende Haltung des christlichen Daseins und Schaffens der Glaube, als Kontakt mit der übernatürlichen Wirklichkeit; die Liebe, als spezifische Form der Gottes-Hingabe im Pneuma; vor allem aber die Hoffnung. Hoffnung ist die Haltung christlichen Daseins und Schaffens"); *Wille und Wahrheit*, 127, 145.

<sup>33</sup> Ch.ペギー著；猿渡重達訳『希望の讃歌——第二徳の秘義の大門——』中央出版社：東京，1978 参照（「わが子よ，神を信じなければなりません。神はわたくしたちをよな

希望と人間の希望はいかなる関係にあるのか。神の希望の模倣や偽造に過ぎないのか、神の希望と並行して為される徳なのか（その場合も、この能力は間接的に神から来るものであろう）、あるいは神の徳への参与なのか。断言できるのは、神を抜きにしても人間的な希望はあり得るかもしれないが、キリスト教的な希望の徳は神の望みに共鳴し、それに呼び起こされて生じるものに他ならない、ということである。神は人間のうちに、また人間をもって望むのだが、人間の希望なしに望むのではない。

この他、対神徳ではないが、次の特に二つの態度も伝統的に徳と呼ばれており、グアルディーニによれば、これらも神を発端としている。それは、忍耐と謙遜である。これらの徳もまた基本的に神と協力する場であり、本来ならまず神に帰せられる特質に人間が与り、それをあたかも自分自身のものであるかのように発揮するものである。現在では当たり前かもしれないが、グアルディーニが生きた時代に、神の謙遜<sup>34</sup>について語ることはさぞかし斬新なことであったに違いない。心の柔和なキリストの成し遂げた愛の業<sup>わざ</sup>は、確かに自分を虚化する行為 (kenōsis) を意味していたが、父なる神の態度はいかなるものであ

---

く信頼されました。神はわたくしたちにそのみ子をお与えになるという、委ねられるという信頼を寄せられました。〈中略〉神はわたくしたちに希望を寄せられました。まず最初に事をはじめられたのは神なのです (119-120 頁) 」。)

<sup>34</sup> R. GUARDINI, *Der Herr*, 387-396, ここでは 395 頁 (“Das ist Gottes Demut. Seine Bewegung in das, was Nichts ist vor Ihm; nur möglich, weil Er der All-Große ist. Daraus wirkt Er sich eine letzte Glorie: ‘Mußte Christus nicht das alles leiden, um in seine Herrlichkeit einzugehen?’ (Lk 24,26) Und daraus holt Er die Herrlichkeit jener neuen Schöpfung, von welcher Paulus und Johannes prophetisch reden. Das muß hinzukommen, damit die christliche Liebe entstehe. Jene Liebe, die das Leben Jesu trägt und nach Johannes Gott selber ist, ruht auf dieser Demut. Gott ist der Demütig-Liebende. Welche Umwertung aller dem Menschen gewohnten Werte – nicht nur der menschlichen, auch der göttlichen! Wahrlich, dieser Gott wirft alles um, was der Mensch im Hochmut seiner Empörung von sich aus aufbaut. Vor Ihm erwacht die letzte Versuchung, zu erklären: Einem solchen Gott beuge ich mich nicht! Einem absoluten Wesen, einer Allherrlichkeit, einer höchsten Idee, einem erhabenen Olympier, ja. Diesem Gott – nein! Christliche Demut aber ist der Mitvollzug dieser Gesinnung Gottes. Sie bedeutet zuerst, daß der Mensch annehme, Geschöpf zu sein. Nicht Herr, sondern Geschöpf. Daß er annehme, Sünder zu sein. Nicht edler Mensch, schöne Seele, hoher Geist, sondern Sünder“ ) 。

うか。グアルディーニによると、神の最高の偉大さは謙りににおいて現れる。神は何も必要とせず、自分で事足りるにもかかわらず、自らを危険に晒すまで無へと踏み出し、愛の他にどんな理由もなく被造物へと手を差し伸べる。創造と再創造に当たる救済によって一見すれば自らの超越性を控え、ある意味で限定してしまうようにも見える。神は崇められるに値する存在でありながら、赦される権利を持つてもない人間の過ちを見過ごしたりする。そう考えると、謙遜は弱い者が取らざるを得ない態度ではなく、強い者の特権であることが分かる<sup>35</sup>。すなわち、自分の尊厳を十分に意識した上で、それに固執しないという自由を含意している。真理と密接に結ばれ、まさに在るべき自分を是とすること、他の何者にも成ろうとしないことを意味する徳であるがゆえに、最大のレベルでは神にしか出来ない態度である。グアルディーニが断言するには、謙遜は神に源泉があり、そこから湧き出る<sup>36</sup>。キリスト者の謙遜はただ神の謙遜と類似しているのではなく、それと密接に結ばれている。ニュッサのグレゴリオスが言うように、神の性質のうちで最も模倣しやすいのはまさに謙遜である<sup>37</sup>。謙遜は人間にとって自然な能力であるが、人間がこれを自由な意思によって選ぶとき、神は自ら人間の側に歩み寄るのであり、そのようにして神の性質の模倣が可能

<sup>35</sup> M.シェーラー「価値の転倒」『シェーラー著作集』、第4巻、白水社：東京、1977、33, 38を参照。

<sup>36</sup> R. GUARDINI, *Ethik*, 892, 1174. その他, R. GUARDINI, *Der Herr*, 440, または *ID., Glaubenserkenntnis*, 58, 66; *Johanneische Botschaft*, 19も参照。この意味においてはグアルディーニは強く反ニーチェ的な立場に立っている (*ID., Das Ende der Neuzeit. Die Macht*, 120-121, 永野藤夫訳『権力について——道案内の試み——』天使館, 2002年, 34-35では次のように述べられている。「謙遜は、弱さと生活の貧しさ、存在の要求と気位の欠乏における自由に対する表現、ニーチェが「頹廢たいはい」や「奴隷道徳」とよんだ、あらゆるものの本質に、なっている。だが、それで、現象の意味は完全に失われる。ほとんど二千年に及ぶキリスト教史において、あの判断の向けられることの実現の、謙遜と形式についての考えが、見出されることは、すぐ認められる。だが、それは頹廢そのもの、つまり、もはや不可解な偉大さからの墮落を、意味している。キリスト教のいう謙遜とは、力の徳であり、弱さの徳ではない。元来の意味では、謙遜なのは、強く、気高く、大胆な人である。謙遜の態度を初めて実現し、人に可能にしたのは、神自身である。それを示している行為は、言葉の人間化である」)。この行為は言うまでもなく愛に根ざしている。

<sup>37</sup> "Homily I on the Beatitudes", §4 (82,20), in GREGORY of Nyssa, *Homilies on the Beatitudes*, ed. H.R. DROBNER – A. VICIANO, Brill: Leiden – Boston – Köln, 2000, 27参照。

となるのである。有限な物質や被造物を遙かに超えているはずの神が、それにもかかわらず被造物へと傾き、自分をその手に引き渡し、何の利益もなしに憐れむという発想は、古代世界にとっては不合理的で、冒瀆とさえ見なされていた。グアルディーニに影響を与え、励ました M.シェーラー（1874-1928）も既に謙遜をキリスト教的な徳中の徳であると指摘している<sup>38</sup>。

最後に、神の謙りについて、グアルディーニが1942年2月12日に日記に書き留めたことも引用に値する。それによれば、謙遜の第一段階はただの慎み深さや謙虚さであり、第二段階は真理に根ざした自己を忘れる態度であるが、第三段階は神の動きを共に実行する愛なのである。

Demut: Ihre erste Stufe ist die Bescheidenheit, welche sagt: Andere sind auch noch da und sind vielleicht besser als ich – wozu noch der Geschmack kommt, der es dumm findet, sich vorn hinzustellen. Ihre zweite Stufe ist das Stehen in der Wahrheit, über welche die eigene Person sich selbst vergißt. Die dritte Stufe ist die Liebe, die jene heilige Bewegung mitvollzieht, in welcher der große Gott sich ins Kleine hinabgeworfen hat<sup>39</sup>.

それから、忍耐に関しては、その典型も実は神のうちにある、と聖書から読み取ることができる（2ペト3:9参照）。これは人間の性質を神に投影していると言うことも出来るが、逆に人間の忍耐が神の忍耐を反映し、それに養われて

---

<sup>38</sup> M.シェーラー「価値の転倒」『シェーラー著作集』、第4巻、白水社：東京、1977、25-26（「謙虚さは、キリスト教的徳の最も柔和にして最もひそかな最も美しい徳である。〈中略〉謙虚は、キリスト的・神的なもの一つの偉大な運動——キリスト的・神的なものが、あらゆる人間と一切のもの自由で神聖なしもべとなるために、自発的にその高貴さと尊厳とを放棄して人間のもとに到来するという運動——を内面的・心的に模写したものである」）。また、「キリスト教的愛のまさに最も香り高い開花として、謙虚さは、すぐれてキリスト教的な徳であり、またその最も純粋な姿においては、ただもう神聖で神にかかわる愛の運動が魂の上に投げかけている柔らかな影絵である」（32頁）を参照。

<sup>39</sup> R. GUARDINI, *Stationen und Rückblicke*, 125.

いるとも言える。事実、キリスト教神学にとっては、神の忍耐や他の属性はただの模範ではなく、分け与えられることによって人間に働きかけ、内的な力として伴い、人間を強化するものでもある。その意味において、克服できない敵や恵みを拒み続ける者に耐え忍ぶのは、まず寛大や高邁に富む神であり、人間と世界が未だに存続しているのは神の忍耐のおかげである。神の忍耐は悪との妥協ではなく、回心するための機会を与えることを意味しているが故に、それは結局、人間が悪と苦しみに耐え忍び続けるための唯一のモチベーションにもなる。グアルディーニに言わせるならば、忍耐は最も魅力の乏しい徳ではあるが、実現をもたらす面では最も重要な徳である<sup>40</sup>。

以上、愛と赦し、希望と、謙遜や忍耐が、何らかの形で神を原点や原動力としていることが明らかになった。これに付け加えるなら、慈しみもまたそうである。慈しみは愛である神の本質の完全性であり、それが外的にも現れ効果的に働く側面である<sup>41</sup>。人間の慈悲はこの世における神の慈しみの具体化であり<sup>42</sup>、キリストへの信仰や弟子であることや、彼との出会いに基づく絆であり、キリストの（他人のための）*pro-existence* への参与である<sup>43</sup>。W.カスパーに言わせると、慈しみは、神の栄光の反映として示され、イエス・キリストにおいて露わになり、神から人間に与えられることによって他の人に授けるべき賜物かつ義務なのである<sup>44</sup>。このように考えると、自分のうちにキリストのような考えではなく、キリストと同じ考えを持つ人間（フィ 2:5 参照）は、この世では見られないキリストとの特殊な関係に留まっている。言葉のみで表現し切れるものではないが、キリストのように行動しているのでもなく、キリストのために善を行なっているのでもなく、キリストの代わりに行動しているのでもなく、

<sup>40</sup> R. GUARDINI, *Ethik*, 699 参照。

<sup>41</sup> W. KASPER, *Mercy: The Essence of the Gospel and the Key to Christian Life*, Paulist Press: New York, 2014, 69, 88 参照。

<sup>42</sup> 前掲書, 129 頁。

<sup>43</sup> 前掲書, 150 頁。

<sup>44</sup> 前掲書, 218 頁 (“Mercy is the reflection of God's glory in this world and the epitome of the message of Jesus Christ, which was given to us as a gift and which we are to further bestow on others”)

むしろキリストの力において、彼の性質を所有しながら、彼と共に行動しているのではないかと思われる。また、神は人間の代わりに行動するどころか、人間において人間を通して人間と共に働くと言った方が適切であろう。徳全体について、グアルディーニの見解を探って分かるのは、すべての現存在に渡って為される（人格そのものの）行為であり、神へと上昇しながら、その実は神から降ってくるものだ、ということである<sup>45</sup>。

### 終わりに

徳はアリストテレス的に解釈しても、元々の本性ではなく、人間そのものによる第二の自然かのようなものである。人間自身のものであるならば超自然的な対神徳もまた人間にとって完全に異質なものではなく、既にあるものの上に成り立っていなければならない。なぜなら、愛一つとっても、エロースは完全に自己中心的なものではないし、アガペーはエロースを無にすることを出発点や目的とするのではないからである。ピーパーの伝統的な見解によれば、人間と人間が持つものは（神から見ても）価値のないものではないからこそ、恩恵はそれを浄化し完成させることができる。神から与えられたものとはいえ、人間が持っている本質は人間自身のものである——自立した良いものと同時に、常に困窮しているものとして<sup>46</sup>。つまり、徳は人間の持つ気質を土台とし、

---

<sup>45</sup> R. GUARDINI, *Tugenden: Meditationen über Gestalten sittlichen Lebens*, 16 (“Die Tugend reicht durch das ganze Dasein, als ein Akkord, der es zur Einheit zusammen-faßt – ebenso steigt sie zu Gott hinaus, besser, sie kommt von Ihm herab”). 殊に対神徳について言えることである。これら三つは啓示の内容を自分のものとするため、人間に賜物として与えられたものであり、啓示において神の自己譲与を自分のものとする（神に由来する）人間の力である。“Der Glaube in der Reflexion”, in *Unterscheidung des Christlichen*, II, 31 (“...der Glaube, die Hoffnung, die Liebe sind selbst ‘göttliche’, ‘eingegossene’ Tugenden. Sie, die spezifischen Aneignungsakte der in der Offenbarung sich vollziehenden Gottesschenkung, sind selbst göttlichen Ursprungs. Der Offenbarungsinhalt soll mit der gottgeschenkten Glaubens-, Liebes-, Hoffnungskraft angeeignet werden”).

<sup>46</sup> J. PIEPER, *Faith – Hope – Love*, Ignatius Press: San Francisco 2012, 218, 260（邦訳、100頁と157頁）を参照（「われわれはけっして「無」ではなく、何者かであり、被造物たる限り、たしかに神の賜物ではあるが、固有のものたるべく与えられたところの存在を所

それに依拠しながら、それを上昇させているのである。違う視点から見ると、一般的な徳でさえただの人間のものでないなら、ましてや対神徳は聖霊の注入と内的な働きによって与えられ、なお人間の協力と主体性を消さない形で与えられるものだと強調しなければならない。これは、キリスト教の倫理について基本的にキリストと共に行動し、キリストのうちに振る舞うことであると考えられる。S.ピンカールと同様の立場である。彼によると、キリスト者において諸徳はもはや人間だけの持ち物としては考えられず<sup>47</sup>、聖霊が我々のうちに、本来我々にできない行為を（しかも、まさに我々の行為として）我々に行わせてくれるのである<sup>48</sup>。

以上のことから、徳は人間が恩恵と協力しつつ得られる宝であり、他ならぬ神の命であることが理解できる。このようにして、愛や赦しは究極な意味で神の能力（への参与）としてしか可能ではないばかりか、人間の愛や人間の赦しによってのみ、神は自分の命をこの世において常に生き続け、いつも新たに生きることができる。結局、神が目に見える形で行動しているのは基本的に人間を介してであり、人間のおかげなのである。神と関わりを持つためには、まず人間との関わりから始めなければならない。愛によって神と結ばれている人間はある意味で自分自身であることをやめるのだが、別の意味では他者から隔て

---

有している。〈中略〉つぎのようにのべているのは、いまだ分裂していない西欧キリスト教世界の最後の偉大な教師たるトマス・アクイナスである。「もしも自然本性的な愛 [アモール]、すなわちエロスがそれ自体において善きものでなかったならば、カリタス [アガペ] といえどもそれを完成することはできなかつただろう。その時には、おそらくアガペはエロスを止揚し、排除しなければならなかつたことだろう」…）。

<sup>47</sup> S. PINCKAERS, *Morality: The Catholic View*, St. Augustine's Press: South Bend, Indiana 2001, 71, 88 ("The infusion of love into the roots of the virtues effects a vital transformation: By placing us in communion with the person of Christ, charity renders us so receptive to the motion of his Spirit that we can no longer regard our virtues as our own property. Although they remain something deeply personal within us, they have become the property of the one who now inspires them").

<sup>48</sup> S. PINCKAERS, *The Sources of Christian Ethics*, The Catholic University of America Press: Washington D.C.: 1995, 116 ("[Faith] wins for us the gracious strength of the Spirit which slowly, like a rising, pervading sap, produces works in us that are ours and done by us yet come from another source, nobler and more powerful than we").

られることとしての自己同一性を超えることができる。理想かつ目標としては、人間が為すこと全てはいつも神をも引き込み、神が為すこと全てに人間も参与しているように招かれながら完全性へと向かう。さらに、人間はそれぞれ固有の仕方<sup>じほう</sup>で同じ神の愛や希望を分け与えられて、神と同じ徳を促されているということは、みな別々の徳を實踐しているのではなく、まさに同じ愛や赦しや慈悲に満たされてこそ、一つの有機体である教会をなすことが出来るということである。この意味においても、徳が個々人を主体とする神の持ち物であるとの理解が重要に思われる。

最後に、神も人間も（同じ）徳の主体であるなら、その主体性とはどのようなものであるかを改めて考える必要がある。徳がますます完成されていくことを意味するなら、初めから完全である神には当てはまらないし、失敗で終わる可能性もあるからこそ優れた状態にあると言えるのが徳であるなら、神が徳を持っているとは断言できない。しかし、ある意味で人間も神も愛し、赦し、望み、忍耐し、謙遜であるが、神の場合はそれらは単なる属性ではなく、これらの行為は神の本質そのものであるというところが人間と異なる。「神は愛である」や「私 [キリスト] は命である」ということは、愛するとか、命をもたらすということの意味するわけではなく、最も強い意味で全存在をもって愛であり慈しみであること、また愛さずにも慈しまずにもいられず、それでもなお自由にそれを発揮することを言わんとしている。それに対し、人間は神の「徳」が最初にあり、それをまず受け入れて経験しており、それを実現させてもらっているからこそ、このような徳の主体であり得る。徳を発揮する人間は、やがて神のように（その全存在が）徳になる希望を持っている。徳に基づいて善を行うことは極めて自発的、独創的な行為ではあるが、それを前もって知り、何が善であるか、何が為されるべきかを神は定めている（エフェ 2:10 参照）。とはいえ、この自由な恵みにいかにして応えるか、どのように善を実現するかは人間に任されているから、一人では実現できないながらも、ただの道具に過ぎないとも限らない。ある人は、すべての善い業<sup>わざ</sup>はただ恩恵の實り<sup>み</sup>でなければならないとし、純粋な人間的な徳を否定しているが、逆に恩恵を受け取り、保ち



続けるためには、それを行動へと転換し、それをより豊富にする以外、仕方がないとも言えよう。恩恵は徳に依存してはいないが、徳において現れ、積極的な有徳な生活によって確認されるだけではなく、増すようになるとすら言えよう。恩恵の受け取り方によって、同じ恩恵が違う人において違う徳を引き起こすのもそのためである。なぜなら、恩恵を受け取る人間はある意味でその原因となるからである。

冒頭の疑問に戻ろう。キリスト信者がもたらし実現する平和が神の平和に他ならないかと言うと、実体と内容においては確かに、神の平和と異なる別のものではない。人間は自分固有の平和を作るために召されているわけではない<sup>49</sup>。しかし、主体性においてはまさに自分が実行者である形で神の平和を分け与えられ、それに能動的に参与し、それをこの世に伝える。ここで言う平和と同じことが、上記の愛や希望、忍耐や謙遜などについても言うことができる。本稿で扱った徳は全てではないが、その最大の実現はキリストに学ぶことだけでも、キリストの基準に適合し彼と同型化するだけでもなく、キリストの徳の共同の実行者にのみ可能である。

---

<sup>49</sup> この見解は、R.カンタラメッサが「平和をもたらす人は幸いである」という聖書箇所に関して主張している（R. CANTALAMESSA, *Beatitudes: Eight Steps to Happiness*, Servant Books: Ann Arbour, 2009 参照）。

